



「愛刀、関の孫六引っ提げて、おじの助太刀、高田の馬場へ宙を飛ぶ」。チャンバラ映画血煙高田の馬場(1937年)の終盤。クライマックスに向け、声を張り上げようとしたその時、活動弁士(井上陽一さん(78)(高砂市))は目の前が真っ白になった。「フィルムが切れたんかいな」と思ったが、声が出ない。誰かが肩を揺すっている。

気がつく、病院のベッド。2016年1月、姫路市の老舗映画館「シネ・パレス山陽座」の閉館イベントで、無声映画を上映中、熱演のあまり倒れたのだ。酸素マスクを外し、点滴の針を引っこ抜き、ふらふらの体で映画館に戻ると、客席の拍手に迎えられる。「山陽座はなくなっても、映画はなくなりませんで。いつもの名調子で応じた。」



映画への愛は、少年時代に戦後の姫路で育まれた。吸い殻に乾燥ヨモギを混ぜたたばこを闇市で売った金を握りしめ、映画館に通い、「ターザン」や「心太助」に心躍らせた。

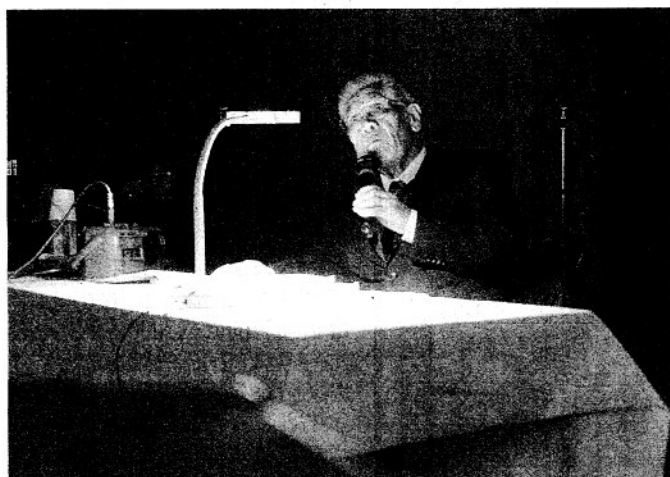
語りまっせ 命ある限り

中学卒業後は「毎日、映画が見られる」と思い、年齢をこまかして高砂市の映画館に就職した。だが、隣の加古川市とを自転車で行き、フィルムを運ぶ日々。20歳で映写技師の免許を取ったが、映写室では約10分おきのフィルム交換に追われ、楽しむどころではなかった。



転機は30歳を過ぎて出かけた無声映画の上映会。滔々と流れる弁士のセリフ回しに、生の三味線やトランペットが続く。こんな粋な映画の世界があったとは。

上演後、弁士の浜屋波さん(故人)に駆け寄った。「次はどこだやるんてっか」。大阪、岡山、広島まで追いかけた。「君、若いのに、こんな好きか? いっぺんやってみるか?」。浜屋



「私にとって映画は今も娯楽の王様。語り続けたい」と、無声映画に命を吹き込む井上さん(伊丹市で)

「関西最後」の活動弁士 井上陽一さん

んの言葉は渡りに船だった。5、6年、浜さんと各地を回った。開演直前、「ここやって」と言われ、ぶっつけ本番で挑んだ。師匠が嫌がる退屈なシーンを任せられることも多かったが、度胸はついた。「色は匂えど、散りぬるを」。耳で覚えた七五調のナレーションを、師匠のまねから、自分のものにしていった。



時は流れて、40年。41歳で独立した「若手活動弁士」も、500回近い公演をこなし、今では「関西最後の弁士」と呼ばれる。各地の映画祭に招待され、井上さんを追いかけるファンもいる。神戸市垂水区の宮本寿芳さん(67)夫妻も「同じ映画でも、毎回違うのが面白い。究極のライブ」と県内の上映会に足を運ぶ。

活動弁士 音声付き映画が登場するまで、無声映画は上映の際、活動弁士が劇場で役者のセリフを語り、ナレーションを加えた。関東は朗読調だったのに対し、関西は七五調で大仰な節回しが好まれたという。弁士の他に、三味線やピアノ、トランペットなどの楽士が付き、シーンに合わせて生演奏で、喜怒哀楽を表現した。井上さんは、楽士の代わりに独自に録音、編集したカセットテープを流しながら、上演している。

昨年12月、伊丹市の公民館で「忠臣蔵天の巻、地の巻」(38年)を終えると、男性客が握手を求めてきた。「悪役の吉良が際立ってた。忠臣蔵の出来栄は吉良が握ってるねん」。映画プロデューサーの鶴久森典妙さん(68)も才能に魅せられ、一緒に上映会を続ける。16年には、井上さんのドキュメンタリー映画を製作した。「弁士は映画草創期に重要な役割を担った。本物を知る人は、井上さんで最後。浄瑠璃などに通じる話芸を後世に残したかった」



井上さんは7日、元町映画館(神戸市中央区)で「血煙り荒神山」(29年)で活弁を披露し、同日から13日まで、自身のドキュメンタリー映画も上映される。12月、赤穂市での「忠臣蔵」の公演まで、今年もスケジューリングは埋まってきた。

「倒れてる暇あらへん。パラック建ての映画館で出会った時から、私にとって娯楽の王様はいつまでも映画。喜んでもらえる限り、命ある限り、語りまっせ」(畑夏月)

特報

あす公開

人気アニメ 聖地の喫茶店